編集後記

ここに第1号をお届けします。分野・時代・執筆者とも多様性がある内容となりました。

黒田先生は、難波田城資料館の企画展「難波田氏とその時代」で本年3月にご講演いただく予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、講演会は中止になりました。その講演で予定されていた内容を文章化してくださいました。難波田城に関する興味深い史料を紹介され、また、戦国時代の難波田一族についても新見解を示されています。

和田は、富士見市に入職して4年目に出会った資料を気にかけ続け、30年目のまとめです。文中で、県内に勝坂期の土偶が稀であることを記していますが、さらに富士見市に限ると、縄文時代中期の住居跡を数百軒調査しているにかかわらず、土偶が1点も発見されていません。

早坂は、企画展の資料調査を端緒とする研究です。専門外である系図の検討へ挑みました。資料間の距離や系統を、相違の数で計る方法は、多くの学問分野で用いられています。たとえば、ウイルスの株の系統を調べる方法も同様です。

駒木は、地域の伝統工芸が「趣味」として引き継がれつつある事例を紹介しました。一見、偶然の連なりですが、それを機会として捉えたからこそです。コロナ禍で、全国各地の郷土芸能が継承の危機にあると報じられています。市内の郷土芸能も危機にありますが、乗り越えて欲しいと願います。

山野は、難波田城公園・資料館 20 周年記念誌『学びの広場　難波田城』で、ちょこっと体験の項を執筆しました。わずか数行の記述のために、多量のデータを集計していたことから、本誌での詳しい紹介を求めました。さらに、コロナ禍の影響についてもまとめてくれました。

齊藤は、収蔵庫で「発見」された興味深い資料を紹介しました。可塑性があり装飾に富む土器と異なり、石器の年代は特定しづらいとされています。その中で有力な可能性を探りました。石材産地分析にご協力いただいた東京航業様に感謝いたします。

髙橋は、市民から寄贈された資料の紹介です。採集品とはいえ全体形状をよく残し、特徴的な装飾や使用痕跡が残っています。富士見市内の弥生文化については企画展図録『みずほの台地の弥生の暮らし』や『方形周溝墓と鉄剣』でまとめられています。合せて御覧ください。

来年春には第2号の刊行を予定しています。当館職員以外でも、当館の所蔵資料を用いた研究や、富士見市域に関する地域研究を投稿していただくことができます。資料館へご相談ください。

富士見市立資料館調査研究報告 第1号

令和3年（2021）9月30日発行

編集･発行　富士見市立資料館

本館　富士見市立水子貝塚資料館
〒354-0011 埼玉県富士見市大字水子2003番地1
TEL 049-251-9686　FAX 049-255-5596

分館　富士見市立難波田城資料館
〒354-0004 埼玉県富士見市大字下南畑568番地1
TEL 049-253-4664　FAX 049-253-4665